暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

～第二二六号～

立夏　五月五日

度会氏ゆかりの妙見菩薩

三重県総合博物館で開催中の「伊勢志摩～常世の浪の重浪よする国へ、いざNOW！」展の会場でひときわ目を引いたのが、木造妙見菩薩立像でした。高さ百五十五センチあまり、髪を二つに分けた角髪に結う童子像は、鎌倉時代作で、国重文指定を受けています。左手は人差し指と中指の二本を立て、右手は腹部の前で宝剣を持つ形をとり、ふっくらとしたお顔立ち。厳かな雰囲気を漂わせています。

妙見というのは北の夜空に輝く北極星の仏教語。北極星や北斗七星を神格化したのが妙見菩薩で、国土を守り、災害を除き、人の福寿を増すとして信仰されてきました。じつはこの像は、伊勢市の常明寺に連なる岡本宮（妙見堂）に安置されていました。

常明寺は外宮神主の度会氏の氏寺で、江戸時代には広大な境内を持ちましたが、明治の神仏分離で廃れてしまいます。この像は地元有志に支えられたものの、昭和三十一年に読売新聞社の所蔵となり、伊勢から離れ、東京へ移されました。それがこの企画展を機に里帰りしたのです。

妙見堂は、伊勢市岩渕町三丁目に復元されていました。勢田川に架かる小田橋近くの旧伊勢街道沿いに登り口があります。堂前の説明板には、「貞観元年（八五九）、度会氏の遠祖大内人高主の一五歳の娘（大物忌）が勢田川で水死したが遺体は見つからず、その際、川底から得た童形像を岡崎宮にまつった。するとその翌年から高主に三年続けて双子の男子が産まれた」と妙見菩薩の由来が記してありました。度会氏ゆかりの童子像だったのです。

急な石段を登った丘に建つ妙見堂からは、外宮の高倉山がよく見えます。瑞々しい緑に覆われた山々、季節は立夏を迎えています。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁